

中学校英語科における言語活動と英語運用能力の関係性について

The relationship between language activities and English communication abilities in junior high school English classes

植西 仁美

UENISHI Hitomi

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

受理日 令和5年11月15日

抄録：中学校英語科において、授業での言語活動の時間と生徒の英語運用能力の向上に関係性が認められるのかについて研究を行った。方法として、授業での言語活動の時間を測定し、その後3人での話すこと〔やり取り〕のパフォーマンステストを行い、生徒の英語運用能力を測った。その組み合わせを2度実施した結果、授業での英語を使った言語活動の時間が長いほど、生徒の英語運用能力も上がることがわかった。

The purpose of this study is to investigate the relationship between language activities and students' English communication abilities in junior high school English classes. First, we measured the time of language activities in English classes. After that, we measured the students' English abilities by three-person speaking (interaction) performance test.

As a result, it was found that the longer the time of language activities using English in class, the better the students' English communication abilities.

キーワード：中学校英語科、言語活動、英語運用能力、パフォーマンス評価、話すこと〔やり取り〕

1. はじめに

本研究では、中学校英語科における言語活動が、生徒の英語運用能力、特に話すこと〔やり取り〕の能力において、どのような変化をもたらすのかについて検証する。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』（文部科学省、2018、p.6）では、「授業では依然として文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組み、特に『話すこと』及び『書くこと』等の言語活動が適切に行われていないことや、『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動が十分でないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないこと」と指摘している。

実際、中学校における授業内での英語を使った言語活動を目向けると、教員によって取り組む時間が大きく違う。そこで、英語で言語活動を毎時間行っている学級の生徒と、あまり言語活動を行っていない学級の生徒とでは、英語運用能力に違いが出るのか。この

ことについて調べ、言語活動と英語運用能力の向上における関係性について研究を進めた。

1.1. 言語活動について

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』（文部科学省、2018、p.85）では、「言語活動は、『実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなど』の活動を基本とする。」と明記されている。そして、「言語活動を行う際は、単に繰り返し活動を行うのではなく、生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。」とも書かれている。つまり、単に英語を話している、または書いているからと言って言語活動を行っているとは限らない。言語の使用場面に応じて具体的な言語の働きを取り上げ、言語活動を行うことが必要なのである。また、小学校の中学年の外国語活動で実践されている「自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、好みや要求などの自分の考えや気持ちなどを伝え合う活動」や高学年の外国語科で実践さ

れている「日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを伝えたり、簡単な質問をしたり質問に答えたりして伝え合う活動」などを踏まえて、言語活動を行うことも大切である。

さらに、中学校では「授業は英語で行うことを基本」とし、生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とし、英語による言語活動を行うことを授業の中心に据えることが求められている。「授業は英語で行うことを基本」とするのは、英語を使って生徒とやり取りするなど、教師と生徒の間でも英語によるコミュニケーションが当然に行われ、生徒の英語使用を促すことにつながるということである。言語活動で、生徒が積極的に英語を使って取り組めるよう、まず教師自身がコミュニケーションの手段として英語を使う姿勢を行動で示していくことが肝心である。その意味で、「授業は英語で行う」とは、指導言語を単に日本語から英語に変えることだけではないことに留意する必要がある。

2. 英語教育の課題

学習指導要領(平成 29 年告示)で、義務教育段階における外国語教育には大きく変化がもたらされた。小学校中学年からの年間 70 時間の外国語活動、小学校高学年の年間 140 時間の教科としての外国語が始まった。主に学級担任が外国語を指導することとなり、教員、学校による指導力の差が顕著になった。そして、中学校英語科では、文法事項や履修語彙の増加等により、教科書の内容が大幅に増加し、英語科教員は、教科書を終わらせることに終始しているのが現状である。

さらに、「指導と評価の一体化」を実現させるために、評価が3観点に変更された。しかしながら、特に「思考・判断・表現」の観点評価については、中学校の定期テストの問題を確認すると、適切な評価方法が取られていない場合が多く見受けられ、従来の知識偏重の評価方法から抜け出せずにいる実情がある。中学校英語科における育てたい資質・能力を明確にし、その力をつけるための授業、評価を行うためにどうすべきか、さらなる研究が必要である。

このような中、『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編』(文部科学省、2018、p.10)では、外国語科の目標として「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とされている。また、『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編』(文部科学省、2018、p.14)には、「未知の状況にも対応できる『思考力、判断力、表現力等』

を育成するためには、第 2 章第 2 節 2 (1) [知識及び技能] で解説する言語材料を活用し、第 2 章第 2 節 2 (3) で解説するとおり、言語の使用場面に応じて具体的な言語の働きを取り上げ、言語活動を行うことが必要である。」と示されている。つまり、言語活動を通して、思考力、判断力、表現力等を育成するとともに、英語運用能力も高めていくということであるが、十分に実現されておらず、課題となっている。

2.1. 英語教育実施状況調査より

英語教育実施状況調査とは、英語教育改善のための具体的な施策の状況について調査し、今後の国の施策の検討に資するとともに、各教育委員会における英語教育の充実や改善に役立てることを目的として行われる文部科学省の調査である。調査対象は、全ての公立小学校、中学校、高等学校(義務教育学校、中等教育学校を含む)であり、調査実施時期は毎年 12 月である。令和 3 年度に行われた英語教育実施状況調査では、以下のことが報告されている。

2.1.1. 授業における児童生徒の英語による言語活動の状況

小学校において、授業中「おおむね言語活動を行っている(75%程度以上～)」と回答した学級数の割合は 50.6%、「半分以上の時間、言語活動を行っている(50%程度以上～75%程度未満)」と回答した学級数の割合は 41.3%であった。小学校では、9 割以上が半分以上(「75%程度以上～」または「50%程度以上～75%程度未満」と回答した学級数の割合の合計)の時間、言語活動を行っていることがわかる。

それに対し、中学校においては、授業中「おおむね言語活動を行っている(75%程度以上～)」と回答した学級数の割合は 18.1%、「半分以上の時間、言語活動を行っている(50%程度以上～75%程度未満)」と回答した学級数の割合は 53.1%であった(表 1 参照)。

新学習指導要領では、英語を使って聞くこと・読むこと・話すこと・書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが示されているにもかかわらず、授業中「おおむね言語活動を行っている」または「半分以上の時間、言語活動を行っている」と回答した学級数の割合は、令和元年度に比べ、中学校の全体で 7.7 ポイント、低下した。

表 1：授業に占める言語活動の時間の割合

授業に占める言語活動の時間の割合	小学校	中学校
75%程度以上	50.6%	18.1%
50%程度以上～75%程度未満	41.3%	53.1%
25%程度以上～50%程度未満	7.8%	27.1%
～25%程度未満	0.2%	1.6%

2.1.2. 中学校でのパフォーマンステストの実施状況

中学校で「話すこと」「書くこと」のパフォーマンステストを両方とも実施している割合は、9割を超えている（表2参照）。中学校において、パフォーマンス評価が定着していることがわかる。

表2：パフォーマンステストの実施状況

パフォーマンステスト	全体	1年	2年	3年
スピーキング・ライティング両方実施	90.5%	89.2%	90.7%	91.4%
スピーキングのみ実施	7.2%	8.7%	7.1%	5.7%
ライティングのみ実施	2.1%	1.8%	1.9%	2.5%
両方実施なし	0.3%	0.2%	0.3%	0.4%

2.1.3. 英語担当教師の英語使用状況（中学校）

学習指導要領では、授業が英語を使った実際のコミュニケーションの場面となるため、中学校では「授業は英語で行うことを基本とする」としている。授業中に「発話をおおむね英語で行っている」または「発話の半分以上を英語で行っている」と回答した英語担当教師の割合は、中学校の全体で、73.4%であった。これは、令和元年度の調査より3.5ポイント減少した数値である（表3参照）。

この調査では、「生徒の英語による言語活動時間」「英語教師の英語力」の2つの要素が生徒の英語力向上に影響を与えていると分析されている。

また、「教師の英語使用割合」が高いほど、「生徒の英語による言語活動時間」の割合も高くなるとしている。つまり、「英語力のある教師によるコミュニケーション重視の指導（あるいは文法とコミュニケーションの両者を統合した指導）」と「活発な英語による言語活動」が生徒の英語力の向上に必要であると結論づけている。

表3：授業における教師の英語使用状況

教師の英語使用状況	全体	1年	2年	3年
発話を概ね英語で行っている。 (75%程度以上)	15.4%	15.0%	15.2%	15.9%
発話の半分以上を英語で行っている。 (50%程度以上～75%程度未満)	58.0%	58.7%	58.3%	57.1%
発話の半分未満を英語で行っている。 (～50%程度未満)	26.6%	26.2%	26.5%	27.0%
50%程度以上発話を英語で行っている教師	73.4%	73.8%	73.5%	73.0%

2.2. 和歌山市の中学校における課題の調査結果

年間数十回の授業参観、英語研究会への参加、英語教員研修会などを通し、和歌山市の中学校英語教育の課題は次の4つと考えられる。

1. 教員の授業力の差、授業改善に対する意識の差

研修を受けた教員や授業改善に対して意識の高い教員は目的意識をもって授業ができていますが、一方で、ただ教科書をこなしているだけの教員がいることも事実である。

2. 授業内での言語活動の時間の確保

言語活動の時間が少ないだけでなく、授業改善についての数値による効果測定とそれに基づいた客観的な課題把握やフィードバックなどもできていない状況である。今後は教員の意識改革をもたらすため、PDCAサイクルを進めると同時に、数値での効果測定を取り入れ、その結果を基に、言語活動が英語を習得するうえで、どれほどの効果をもたらすかということを実証していく必要があると考える。

3. 定期テストとパフォーマンス評価の内容、評価方法の相違

定期テストの観点を踏まえた適切な出題、パフォーマンステストの難易度、評価方法の違いなどがある。年間あるいは単元を通し、指導と評価の一体化を考え、授業の組み立てを行うことが必要である。

4. 教科会や研究組織の活性化

中学校は、小学校に比べ、公開授業や互観授業、指導案の検討などチームとなって授業改善に向かうシステムが構築されておらず、教科会が機能していない学校も見られる。小中連携も視野に入れ、研究組織の活性化が急務である。

こうした課題および2.1.で述べた英語教育実施状況調査の結果を踏まえ、「2. 授業内での言語活動の時間の確保」がどれほど生徒の英語力向上に関係しているかを実証するため、本研究を行う。

3. 研究の実施方法

本研究の趣旨に同意し、協力を申し出てくれた和歌山市内の中学校4校を選び、英語の授業をビデオ撮影し、その授業での言語活動の時間を測定した。測定した言語活動の時間とは、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行っている時間」である。4校とも中規模の学校であり、地域的には、和歌山市中心部2校、郊外2校であった。

その後、そのクラスの生徒に「話すこと〔やり取り〕」のパフォーマンステストを行った。パフォーマンステストは次の通りに行った。

- ① 当日ランダムに選んだ3人が一組になり、別室に移動し、パフォーマンステストを行う。
- ② トピックを提示し、そのトピックに沿って3分

間、自由に英語でやり取りを行わせる。

(トピックは、既習事項を踏まえ、学年ごとに変える。)

- ③ パフォーマンステストのやり取りをビデオ撮影しておく。
- ④ ビデオが確認しながら、個々の生徒をルーブリックで評価すると同時に、生徒の発話時間を測定する。

その後、授業者に対し、授業での言語活動の充実に対する指導、助言を行った。5ヶ月後、生徒の英語運用能力がどの程度変化しているかを調べるため、もう一度授業のビデオ録画及び言語活動の時間測定とパフォーマンステストを行った。それにより、どのような変化が見られるかについて数値化し、検証した。

その際に行ったパフォーマンステストのトピックは表4のとおりで、学習事項を配慮した内容とした。今回は、3校が3年生で、1校が1年生で協力してもらったため、2年生は実施しなかった。また、パフォーマンステスト時の評価のためのルーブリックは表5の通りである。このルーブリックについては、本研究のため独自に作成したものであり、生徒の英語運用能力を測るため、他者に配慮しながら自分の考えや気持ちを伝えられているかどうか、そして応答しながら会話を続けられているかを測ることを重点に置いている。なお、評価は、グループではなく、各生徒に行った。ただし、観点「会話を続けた時間」と「トピックに沿って3人で話を続けているか」については、同じグループに所属する生徒は全て同じ点数をつけた。

表4：パフォーマンステストの学年別トピック

学年	トピック (1回目)	トピック (2回目)
1	私の好きなスポーツ	行きたいところ
2	週末にしたいこと	私の憧れの人
3	中学校生活について	日本文化について

表5：パフォーマンステスト時のルーブリック

観点	正しい英語を使えているか	会話を続けた時間	他者の話を聞いて応答しているか	自分の考えや思いを伝えているか	トピックに沿って3人で話を続けているか
a	正確な英語で話している	3分間途切れることなく、会話が継続している	他者の話に、つなぎ言葉や相槌を使いながら、応答している	他者の話を受け入れながら、自分の考えも伝えている	他者に配慮しながら、トピックに沿った会話が3人で進んでいる
b	多少のミスはあるが、伝わる英語で話している	途切れることはあるが、3分間会話を続けている	他者の話に的確に応答している	自分の考えを他者に伝えている	トピックに沿った会話が3人で進んでいる
c	英語で伝えられていない	3分間会話が継続していない	他者の話に、応答、反応していない	自分の考えを伝えられていない	2人あるいは1人だけで会話が行われている

3.1. 検証方法

1回目と2回目で授業内の言語活動の時間に差ができたか、また、生徒の話すこと（やり取り）のパフォーマンステスト1回目と2回目で生徒の英語運用能力に差ができたかについて検証を行う。パフォーマンステストでの生徒の英語運用能力については、録画したパフォーマンステストの動画を見ながら、個々の生徒の英語運用能力をルーブリックで評価し、数値化する。また、グループ全体で3分間のうち発話していた時間を計測する。

4. 結果

各校の結果は次の通りである。

【A校 中学校3年生】

(1回目の授業)

言語活動が極端に少なかった。授業内では、文法説明や英作文の問題演習などが中心に行われており、言語活動の時間が確保されていなかった。

(1回目のパフォーマンステスト)

生徒達は、英語で3分間、即興で話すことに戸惑い、3人での会話になっていないグループが多かった。沈黙も多く、重い空気が流れたグループもあった。

また、会話が途切れ途切れになったり、“Do you ~?”のようなYES・NOで答えられる質問が多く、疑問詞で尋ねる質問が少なかった。

(1回目のパフォーマンステストの後)

担当教師に、毎時間言語活動を意識して取り入れること、そして、教師自身ももっと授業で英語を使うことを指導した。

特に授業の帯活動としてスモールトークを取り入れ、疑問詞を使った会話の練習を行ったり、つなぎ言葉の提示したりしながら、生徒たちが、即興でスムーズな会話を行えるような指導を助言した。“Do you ~?”で始まり、YES・NOで答えられる質問が多く、疑問詞で尋ねる質問が少なかったため、授業内で、質問のバリエーションを練習するような取組を入れ、5W 1Hの表を黒板に貼るなど、意識的に使わせるなどの工夫をするよう提案した。

また、反応する言葉“Really?”、“That’s good!”、“Me, too.”などをteacher talkで使っていくように伝えた。

(2回目の授業)

前回より言語活動が増え、帯活動のスモールトークが続けられていた。生徒も英語での会話を楽しめるようになっていた。グループ活動も取り入れられ、アウトプットする機会が増えていたが、3年生ということもあり、書くことや文法問題に取り組む時間も多いうことであった。

(2回目のパフォーマンステスト)

1回目のパフォーマンステストでの悔しい思いを挽回したいと意気込んできたグループが多かった。各グループの平均を取ると、テストの3分間で、英語を話していた時間が1分間から約2分間へと倍増していた(表6、図1参照)。

表6：A校の結果

A校	1回	2回
授業での言語活動時間	5分	15分
ループリックの平均点数	9.6	10.6
パフォーマンステスト3分間で会話が続いた平均時間	1分0秒	1分59秒

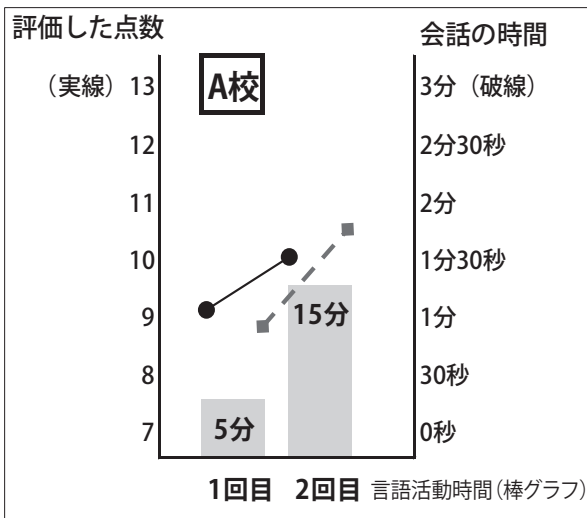


図1：A校の結果グラフ

【B校 中学校3年生】

(1回目の授業)

毎時間、授業開始から15分間は、話す活動を取り入れており、非常に言語活動を活発に行っていた。生徒は英語で話すことに全く抵抗なく、ジェスチャーやつなぎ言葉もうまく活用しながら、英語でのやり取りを行っていた。

(1回目のパフォーマンステスト)

生徒は、英語で話すことに慣れているため、なんとか会話を続けていこうとする姿が見られた。相手が言ったことに対して反応したり、相槌を打ったりしながら、スムーズなやり取りが行っていた。

課題としては、トピックに関する内容の深まりがないことである。もう少し、会話内容の充実ができればと感じた。

(1回目のパフォーマンステストの後)

担当教師に、今後も毎時間言語活動を続けること、そして、内容に深まりが出るよう、相手の話を受け入れながら、自分の意見も伝えられるような言語活動の提案を行った。例えば、自分の意見を伝えた後に、根拠を続けて伝えたり、相手に根拠を尋ねたりするよう

な活動を続けることを伝えた。

例：“What subject do you like?”

“I like English because it is very interesting. How about you?”

“I like English too, because our English teacher is very kind.”

また、生徒が内容についてもっと深く話すために、自分たちの会話内容を振り返ることができるようにする工夫、例えば会話を録画することやマッピングを用いて可視化する、話した後に書く活動を入れるなどの取組を行うように伝えた。

(2回目の授業)

授業開始から15分間の言語活動の見直しと話した後に書く活動が設定されていた。このことにより、生徒自身が、相手の話した内容に関連づけた質問や、自分の意見も伝えられていた。また、書くことにより、話した内容をもう一度振り返ることもできていた。

(2回目のパフォーマンステスト)

1回目のパフォーマンステストより、相手の発言に関する内容で会話を広げ、より詳しく聞くための質問ができていた。また、パフォーマンステスト中、グループの中で伝えたいけど、どう伝えればよいか悩んでいる生徒に対して、選択肢を示したり、ジェスチャーを促したりするなど、他者に対して配慮する態度も見られた。3分間が短く感じたという生徒の感想が多かった(表7、図2参照)。

表7：B校の結果

B校	1回	2回
授業での言語活動時間	22分	40分
ループリックの平均点数	10.5	12.1
パフォーマンステスト3分間で会話が続いた平均時間	1分33秒	2分12秒

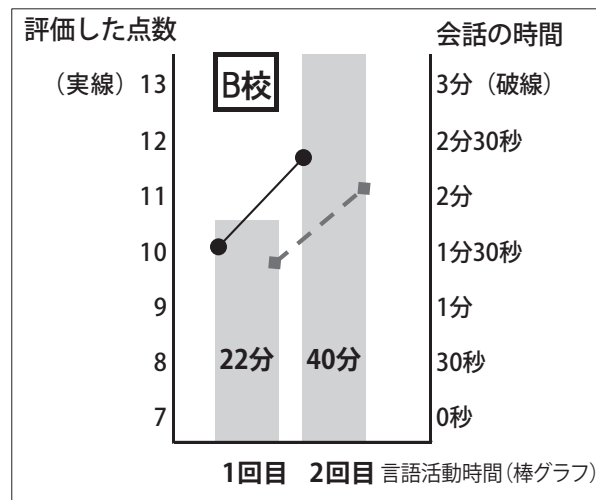


図2：B校の結果グラフ

【C校 中学校1年生】

(1回目の授業)

テンポ良く授業が進められており、生徒の英語の発話量も多い。ひとつの活動に充てる時間が比較的短く、どんどん場面が変わっていく感じである。1年生ということもあり、長時間授業に集中することが苦手な生徒が多い実態に合わせた授業であると教師は言っていた。5領域をうまく使い分け、視覚支援も多かったので、生徒たちは、言語活動を楽しみながら行っていた。

(1回目のパフォーマンステスト)

学習したことを発揮したいという生徒の思いがあり、なんとか会話を続けたいと頑張っていた。しかし、既習内容の少なさから単調な質問になったり、相手の話を受け入れた上での確に応答することに課題が見られた。また、ひとりの発話量が多く、他の2人は、答えるだけというグループもあったので、相手の話を聞いて受け入れる姿勢も必要だと感じた。

(1回目のパフォーマンステストの後)

1年生としては、英語の発話量が多く、積極的に話している生徒が多いが、会話ということを意識させながら、相手の話を受け入れた上で、自分の意見や質問を行うようになれば、さらに会話がスムーズになることを指導教師に伝えた。例えば、相手に質問するとき、まず自分のことを伝え、相手に質問するという指導を行うことなどを伝えた。

例：“I like soccer. I practice it every day. Do you like soccer?”

(2回目の授業)

疑問詞の学習内容で、単元ゴールを明確に示し、それに向けた言語活動が行っていた。1回目よりもペアやグループでの言語活動を多く取り入れ、ひとりひとりが英語を話す必要性を高めていた。視覚情報や板書の工夫により、生徒たちはよく理解できていた。

(2回目のパフォーマンステスト)

トピックが、先日学習した内容であったので、定型文を使いながら、質問する内容に困ることなく、会話が進んでいた。1回目に課題であった相手の話を受け入れることや的確な受け答えについても、改善されていた。また、3人で会話をすることに関しても、授業で何度か練習を行ったようで、うまく会話をつなげることができていた(表8、図3参照)。

表8：C校の結果

C校	1回	2回
授業での言語活動時間	25分	40分
ルーブリックの平均点数	11.1	11.9
パフォーマンステスト3分間で会話が続いた平均時間	1分37秒	2分3秒

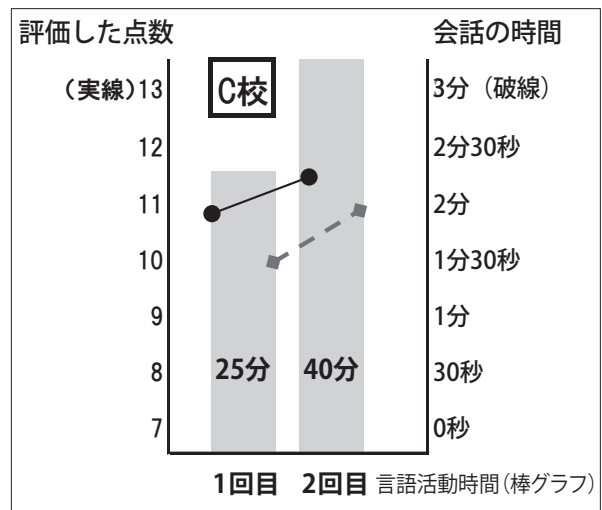


図3：C校の結果グラフ

【D校 中学校3年生】

(1回目の授業)

授業中に教師が発話する英語が少ないように感じた。生徒は、英語に対して前向きに取り組んでいるが、生徒同士で自由に話したり、自分の意見を伝えたりする場面は少なく、どちらかというと、指示されたことをきちんとするという生徒が多かった。

(1回目のパフォーマンステスト)

英語の力があると思われるが、「間違った英文を話してはいけない」という気持ちが強く、話す前に、頭の中でしっかり考えて文を組み立ててから話すという生徒が多かった。そのため、友達に対してすぐに反応できず、会話の間につなぎ言葉なども話さないため、間があいてしまうグループが多かった。

(1回目のパフォーマンステストの後)

まずは、あまり間違いを恐れずに発話することを授業で取り入れるように提案した。そのために、スモールトークを取り入れ、反応する言葉“Really?”、

“That’s good!”、“Me, too.”などを teacher talk で使っていくように伝えた。

また、相手の答えに対して、さらに質問する力をつけてもらうために、teacher talk でモデルを見せたり、生徒に意識させたりするような授業を取り入れるようにアドバイスを行った。

例：“I like tennis. I am a member of the tennis club.”

“How long have you played it?”

(2回目の授業)

写真やイラストを使い、それに対して自分の意見を伝えるなどの言語活動を行っていた。即興性を高めるための工夫が見られた。ペアで言語活動を行っているが、よく使う表現が固定化されており、もっとバリエーションが広がるような課題設定があればよいのではと感じた。

(2回目のパフォーマンステスト)

1回目ほど緊張することなく、取り組んでいた。まだ、正しい英文を話さなければいけないという思いが強く、何度か正しい英文に言い換える場面もあった。

話す内容よりも、英文をなるべく早く理解し、次に自分が何を言えば良いかを考えることに注力してしまい、会話内容に興味関心を持ったり、楽しんだりする余裕がなかったのが、今後の課題となるのでは考えられる。しかしながら、前回よりもスムーズにやり取りが進んでいたことは明白であった(表9、図4参照)。

表9：D校の結果

D校	1回	2回
授業での言語活動時間	17分	27分
ループリックの平均点数	10.3	11.8
パフォーマンステスト3分間で会話が続いた平均時間	1分33秒	1分52秒

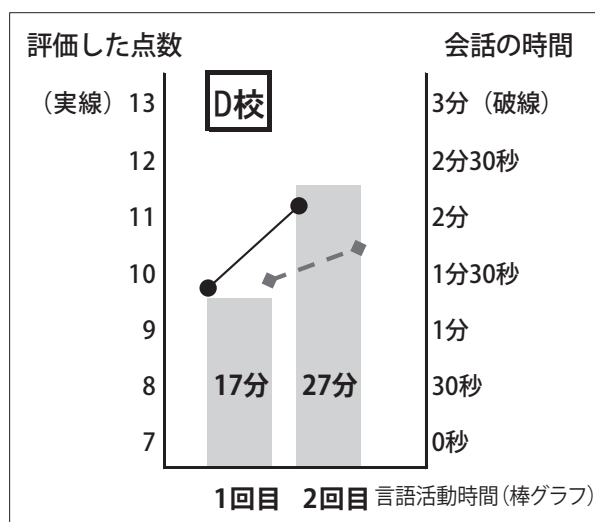


図4：D校の結果グラフ

5. 考察、まとめ

前章で示した図1-4、表6-9より、教師の授業における言語活動の時間と、パフォーマンステストの点数及びそこでの会話時間の両方で評価した生徒の英語運用能力の間には、調査した4校全てにおいて、それぞれの学校内で正の相関が見られることを示すことができた。また、1回目の授業とパフォーマンステスト終了後に各授業者が意識的に言語活動の充実を図るための授業改善を行ったことが、2回目の授業での言語活動の時間の増加、そして生徒の英語運用能力の向上の、両方のよい結果につながったと考えられる。

調査を行い、教師の授業における言語活動の時間と、生徒の英語運用能力には因果関係までは示せないが、言語活動と生徒の英語運用能力に相関があることを、4校での実践から示すことができた。伸びについては、学校ごとに多少差はあるが、授業での言語活動を増や

すことにより、生徒の英語運用能力が高まることは明白である。1回目の授業とパフォーマンステスト終了後、各授業者は、意識的に言語活動の充実を図るための授業改善を行った成果が2回目のパフォーマンステストのポイント上昇などの成果につながったのだと考えられる。つまり、言語活動の時間を増やすことで、生徒の英語運用能力の向上が期待できるということである。また、英語の授業改善を行うことで、さらに生徒たちの英語運用能力も伸びるということである。

1回目のパフォーマンステストを終えた生徒の感想は、「3分間は長かった。」「緊張した。」「もっと伝えたいことがあった。もう一度チャレンジしたい。」「落ち着いて考えれば、表現方法がわかった。」など、即興のやり取りを求められるパフォーマンステストに戸惑いが見られた。一方で、「楽しかった。」「もっと話したかった。」という声も聞かれた。この違いは、即興でのやり取りを行う言語活動を授業内で常に行っているかどうか、定型文のない状態での英語の会話に慣れているかどうかの差ではないかと考えられる。2回目の授業とパフォーマンステスト終了後は、1回目に比べ、生徒たちに余裕が感じられた。生徒たちも1回目終了後、2回目に向けて目的を持って意識的に言語活動に取り組めたことと、3人で自由に会話することへの慣れもあったのではないかと考えられる。また、1回目、2回目とも、パフォーマンステストを受けた直後の生徒たちに、「話したかったけど、話せなかったことはありますか。」と尋ね、その場でフィードバックを行ったことにより、より英語でコミュニケーションを取ることに対する興味、関心が高まったという生徒も多かった。

今後、この結果をもとに、言語活動の重要性と伝えるとともに、パフォーマンス評価の重要性も伝えていきたい。

6. 今後の課題と展望

この研究を通して、今後の課題点として挙げられることは、生徒の英語運用能力を向上させるために、さらに言語活動の時間確保と内容の精選、パフォーマンステストの質と回数を上げていかなければならないことである。

そして、生徒たちは、パフォーマンステストに対して、定期テストのようにあらかじめしっかり準備をしたり、緊張したりする姿はあまり見られなかった。自分の伝えたいことが英語で伝えられなくても、笑ってごまかしたり、日本語で「もう無理」と言ったりするなど、パフォーマンステストに対して、「テストだけでも、定期テストのように重みを感じない」という生徒がほとんどであった。パフォーマンステストも定期テストと同じ重みで評価すべきであると教員の意識、生徒の意識を変えていくことも重要であると感じた。

今回、パフォーマンステストを通して、授業における言語活動の時間と生徒の英語運用能力について明らかな相関関係がわかった。授業動画や生徒の変容等を研修などで共有し、教員の授業力向上と言語活動の充実に役立てていければと考える。

また、このような言語活動やパフォーマンステストは、中学校に限られたものではない。小学校にも発信することにより、小中連携、小学校、中学校の英語研究会の活性化、校内教科会の活性化にもつながることを期待している。

謝辞

本研究のために調査にご協力いただいた和歌山市教

育委員会様はじめ、和歌山市内の4中学校英語担当者様に、心から感謝いたします。

引用資料

- 文部科学省（2018）、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編」、開隆堂出版
- 文部科学省（2022）、令和3年度「英語教育実施状況調査」の結果について、
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00001.htm（2023.5.20）